

『精神分析と社会学』合評会

片上平二郎（立教大学文学研究科）

0. スキップしていく書物としての『精神分析と社会学』

さまざまな議論が並べられ、前に進んでいく書物としての本書

ある問いが提示され、それに対して示唆的な要素を持つ議論が紹介され、その議論が新たな問いを用意していく。

連想ゲームのようなかたちで議論がスキップしながらつなげられていく印象。

しかし、そうであるがゆえに、ヒントのみが羅列されていく印象も。

問いと答えが何であったのかということが見えにくくなってしまいうという一面
たとえば、以下のような「何か」という記述

- ・「何らかの新たな寄与」 p.13
 - ・「何らかの新たな展開を期待できるのかもしれない」 p.15
 - ・「両者のあいだにあるかもしれない何かをめぐる主題と変奏」 p.227
- 「変奏」の中で「主題」がとらえづらくなっている＝魅力とあいまいさ

副題「二項対立と無限の理論」とは？

p.189には「精神分析的なアプローチ、すなわち二項対立と無限の理論によるアプローチ」とあり、それまでの議論の中でたしかに示唆されてきたが、それでも、唐突な印象が

特に「二項対立」とはこの書物の中で何を指しているのか？

さまざまな意味内容を含んでいるが、いまいち見えにくい

もしくは、何にでも当てはめることができるマジックワードになってしまっていないか？

「超自我」と「社会規範」を切り離すことの意味は？

（もしくは、両者がイコールでないとされた場合の両者の関係は？）

そして、「現実」というものを新たな視点から見てみることの意味は？

たしかに、「素朴な」社会学者には、この両者の分離は驚きかもしれない

しかし、「素朴」でない社会学者は、そこからなにをつかめばよいのか？

「快感原則」と「現実原則」の間の差異に対する態度が一貫していないように読めること。

「質的な差異」がないと語られることが多いが、ときに「質の違い」が語られもする

筆者の「無限」というものに対するアンビバレンツな態度？！

→この点については、序章で細かく見てみたい

「精神分析」と「社会学」

「社会規範」の謎や「現実」の謎を、個人の「内面」をモデルとする精神分析で本当に語れ

るのか？（あえての問いとして）

→3章（フロイト）から4章（大澤社会学）の間のアクロバティックに感じられる議論の飛躍

いくつかの論理の飛躍を感じてしまう本書の中での位置

序章内での議論の内部でのスキップ（現実原則と快感原則の関係について）

序章、1章（問いの提起）と2章、3章（初期フロイト論）の間のスキップ

3章までの議論（フロイト心理学内在的）と、4章（大澤社会学）の間のスキップ

4章までの議論（筆者の理論的立場）と、5章の議論（樫村書評）の間のスキップ

4章までの議論（筆者の理論的立場）と、6章の議論（風土論）の間のスキップ

1. 一次過程と二次過程の落差

序章：快感原則と現実原則の関連について

この2つは対等な関係にある独立した2種類の原則ではなく、「現実原則はあくまで、快感原則の「緩和」なのである。快感原則の方が一次的であり、現実原則の方は快感原則が変形を被って二次的に生み出されたものである(p.10)」と本書ではされる

↓

「現実指標の登場とは、…快感原則とは質的に異なる新たな原則の登場ではない(p.12)」

↓

「精神分析にとって現実とは…根本的な基盤である快/不快から構成された産物(p.12)」

1つ目の↓の部分で、「質的」な違いがないと論理付けることが出来るのか？

しかし、p.13では、快感原則の世界と現実原則の世界の根本的な違いが、自他の区別の論理に基づいて語られている

←ここでは「質的」な差が語られていないか？（4章との間のスキップにも関連）

快感原則から構成されたことと、「質的」な違いがないことは違うことなのではないか？

→この点の揺れやあいまいさは、ずっと、本書において残り続けている気がする

後の「無限」に関する議論は「質的な飛躍」によって語られているように読める

「質的な飛躍の“なさ”」が語りたいのか？ 「質的な飛躍の“生成”」が語りたいのか？

=快感原則の一次性を語りたいのか？ 快感原則からの飛躍を語りたいのか？

2つ目の↓の部分で、「現実原則」や「現実指標」と「現実」がほぼつなげられている

←ここも、もう少し吟味が必要なのではないか？

個人の内的な「現実原則」が、「客観的」な「現実」と異なるのはある意味で当たり前

それでも「現実」は「現実原則」と独立してあるという素朴なツッコミを回避できるのか？

1章：超自我と社会規範

快感原則でも、現実原則でも説明できない「反復強迫」という概念の登場

得体の知れない「道徳」 主体に苦痛を生み出したり、「反社会」的にすらすらする可能性

主体の無意識的な「超自我」を、「社会規範」と同じものとして見れないという事態
「超自我のナルシシズムの痕跡(p.37)」

→「超自我という概念はそれまで…二項対立概念群ではうまくいかなかったために、新たに導入された」。「だが、これは、複雑な三者関係にしてみたという次元の問題では」なく、「二項対立の質自体が問われている (p.39)」

←「二項対立の質自体が問われる」というのはどういう問いか？
「二項対立の批判」なのか、「二項対立の意味の強調」なのか？

たしかに、超自我は社会規範とは異なったものであるだろう。

しかし、そのことを持って、超自我と社会規範の関連を切り離すことができるのか？

また、この「反復強迫」や「超自我」、「死の欲動」の不可解さは、快感原則の一次性を否定するものとして読むことができる可能性の余地を持つものではないのか？

→序章で見たあいまさいの延長がここにもある気がする

2. 初期草稿における快の論理

2章：初期草稿における「父」の不在

フロイト初期草稿では、エディプスコンプレックス論における「父」がいない

「第三者」は不在であり、この役割は「自我による制止」によって担われる

=社会規範的なものを經由しない議論の建て方の可能性（ただし、p.59 で多少曖昧な表現）

この議論と後年のフロイトのエディプスコンプレックスの議論の関係における筆者の曖昧さ

・「2つのモデルには明瞭な互換性がない。…容易には互換されない原理的な差異がある (p.59)」

・「結局のところ、「一次過程」から「二次過程」への転換メカニズムがそもそも、ある種の飛躍を、…完結不可能性を内に含んでいる。…「草稿モデル」が後年のエディプスコンプレックスが後年のエディプスコンプレックスモデルの先駆形であるとするならば、エディプスコンプレックス理論もまた、同様の内部亀裂を含んでいる (p.71)」

→ここには、2つの種類議論の揺れがある。

・後文は「一次過程」と「二次過程」の差を「質的」なものとして書いているように読める

・2つの文の間で、草稿と後期フロイトの関係に対する論理が異なっている

←前期フロイトの議論では「一次過程」と「二次過程」の「質的」な飛躍が説明できず、後期フロイト的な「父」の議論が呼び出されたという「常識」的な見方がここから証明されてしまうのではないか？

3章：快に対する2つの論理構造

快感と不快を、興奮の“量の変化”に関係付ける議論と、興奮の“量”と関係付ける議論

=<最強度の部分が全体である>という感覚と、<諸部分の合成量が全体である>感覚

前者（微分的）の一次過程から、後者の二次過程への論理の転換

←筆者は、この転換を、最強度の部分の追放(=抑圧)によって起きるものとして描く (pp.92-93)

しかし、これはどのような論理に基づいているのだろうか？

(最強度の部分はこの時点では「全体」であり、他と切り分けられないのでは?)
そして、この転換の「疑似性」が説明されることになる
おそらく、この「疑似性」という論理において、序章で提起した本評での疑問の、「質的な飛躍」に対するあいまいな態度の一貫性が担保されているように思われる。

しかし、この部分については、評者の場合には、客観的な目安(=数値的なもの)の誕生が関係しているように思えてしまう(言葉の導入と類比的)。

筆者は、一次過程が「微分的」であることによってその複雑さに驚いているが、感覚的に言えば、二次過程で数値的な量概念が誕生することの方が複雑であるようにも思える。
→数値の概念の発生と社会性の獲得は類比的に思える
本書と評者の立場の違い(もしくは、驚きどころの違い)
←主体に、内/外の区分をもたらすものとしての欠如感という要素

やはり、一次過程と二次過程の展開は、なんらかの外的な要素を必要とするのでは?
外の影響を受けるモデルを立てることと、「主体を空っぽの箱」と見ることには差がある
能動性と受動性の2つの面があれば、それで良いのではないか?

「二項対立の理論」としての「精神分析」というものの意味はどのようなものか?
(序章では2, 3章は「二項対立」をテーマと語られる)
「論理的対立項」と「実質的対立項」の話であるのか?(ある/ないのレベル?)
(もしくは本質的なものとしての「実質的対立項」の話であるのか?)
それとも、1章で問いに上がったような「快感原則」と「現実原則」の関係のようなものか?

3. 「無限」の理論(4章)

<無限に続く時間>の登場による、時間(内在)と永遠(超越)の不可能なはずの交わり
「反復」(「以下同様」という装置による「質的な飛躍」
→佐藤俊樹の議論は、この「飛躍」が描かれないと批判される
社会規範の持つ平行線原理のようなアポリア(規範を論じることと無限を論じること)
「無限をいかにして語るのか?」
→土場学の議論は、無限を語るのに別の「愛」という無限が呼び出されたことで批判される

ここにある議論は、これまでのフロイトに使われていた論理構造と適合的であるのか?
「無限」にまつわる「質的な飛躍」が必要とされる議論になっているのではないか?
→たしかに、「擬似的」であるとして語られるが
(しかし、「擬似的」であるなら、大澤と、佐藤・土場の差異はどこに?)

無限の評価に対する筆者のアンビバレンツな態度
(もしくは唐突に出てくる「非ユークリッド幾何学」は「無限」の理論を壊すのでは?)

「規範」と「規範意識」や「超自我」との違い（社会学と精神分析の間）

「反復強迫」と「以下同様の反復」の違いなど

4章の議論は、それまでの精神分析の論理とどのような関係にあるのか？

（たしかに、比喩的に類比することができるが、それ以上のつながりはどこにあるのか？）

4. 応用としての5章、6章

5章、6章では、これまでの論理の応用的に議論が進められる

しかし、筆者は樫村や和辻に対して、非常に複雑な態度をとっているように思われる

（評価したいが、しきれない？）

5章：「ジャンプ」と「他者」

精神分析における「個人知」から「共有地」を生み出す「創発的推測」への「ジャンプ」

= 「隠喩」という「ジャンプ」

3章で論じられた議論もこの「ジャンプ」にまつわるものとして紹介される

樫村は、この「ジャンプ」における「現実的他者」との出会いを強調する

ここにおける「質的飛躍」の強調をどのように筆者は見ているのか？

さらに、「真に問題なのは現実的他者」という言表（p.175）の意味

←章末尾における筆者の複雑な態度

6章：和辻の「間柄」

二項対立が「自然/文化」、「主体/客体」といったものへ

「西欧における「明朗な主体」の無限追求に対して、和辻は「部族とか民族といった日常的世界における『間柄』」の有限性を持ち出して批判を展開する…」

→和辻の「無限」批判 「間柄」と「無限」との関係

（ここで出てくる「批判理論」の「無限の貫徹による自己破壊」とは何か？ p.214）

精神分析の持つ「有限と無限の二重体という視点」の必要性

5. 問いの再確認

本書で語られる「二項対立」とはどのような「二項対立」を指すのか？

（「二項対立」それ自体であるのだとすれば、何にでも適用できる便利すぎる概念では？）

「一次過程」と「二次過程」の差は、質的なものではないと言い切っていると解釈して良いか？

もし、「質的」な要素を含むのならば、その転換の論理は説得的か？

→「無限」というものに対するアンビバレンツな態度にも相同（あこがれと危険さ？）

精神分析の議論と大澤社会学の「無限」の議論はどのような関係にあるのか？

4章において、ほとんど精神分析の論理が登場していないように思える
しかし、「無限」の議論は4章でほぼはじめてあらわれる
＝「精神分析」を「二項対立と“無限”の理論」と呼ぶことはどこで可能になっているのか？
(5章のラカンでそれを行っているとしても、筆者は樫村の議論に完全に賛同していない)

大澤社会学の「社会規範」があらわれてくる構図は、精神分析で語るができるものなのか？
「超自我」や「現実原則」が、「快樂原則」の変形だとしても、「現実」や「規範」がそう
であるとは限らないのでは？
類比性は見ることができるとして、それ以上の部分をどう説明するのか？

「超自我」と「社会規範」の関係を切り離してみることの理論的意味は何か？
素朴にそれをイコールでつないでいる社会学者には驚きの発見であるかもしれない。しかし、
たとえば、両者はイコールでなくても密接につながっていると考えるほんのちょっとだけひ
ねくれた社会学者に対して、この議論はどういう意味を持っているのか？
切り離された後に、両者の関係は再吟味されるべきではないのか？

疑問の提示ばかりを行ってきたが、本書の中には魅力的な議論がたくさんつまっている
たとえば、「超自我」と「社会規範」を単純につなげないことの現在的な可能性

確固とした「社会規範」などというものをモデル化することがしにくい、ポストモダン、ハイ
モダニティ、リキッドモダニティなどと称される現代社会における、個人の基本意識への問い
＝「超自我」の現代的様相をどのように考えるべきか？

ギデنزの再帰性の議論に基づいた「ポスト伝統社会を生きること」
現代社会では、「伝統」というものは、単純に従うものではなく、つねに確認され再解釈され
る

ただし、伝統という「嗜癖」の登場 衝動強迫性
→「伝統」は解体されつつも、ある種の神経症的なものとしてあらわれることがある
←「超自我」というものの現代的様相が問われる必要がある
ただし、ギデنزはこのような嗜癖性を指摘した後、そのような嗜癖性も、「ひとつの選択」
として論じることになる（ギデنزにおける精神分析的な要素への接近と離反）
→より、この論点を強く見ていくためのものとしての「超自我」に対する掘り下げの必要性

ジジェク：法と正反対に向けられるポストモダンの超自我
超自我は「許容された享樂、楽しむ自由が、享樂の義務に反転する局面を示している」（『為
すところを知らざればなり』p.396）

学校をさぼれ、麻薬をやれ、浪費しろという母親の命令
逸脱を止めなくなり、保守的な人生で「侵犯する」娘

内面にある「超自我」というものがもたらす奇妙な状況